

### その3

(田村氏) ありがとうございます。さて、舞台上の準備も整いました。皆さんにも助けをいただいで、舞台上はこのように整っておりますので、ここからは第三部の座談会に移ってまいります。個人的な実践の中で実現された今の金村さんのレクリエーション・ライフ。こうした事を組織的に継続的に実現していこうとするのが今回の交流イベント事業モデルということによろしいですか、野村先生。

(野村氏) そうですね。今回の事業モデルをぜひ全国で確立していただいで、そして普及促進していくためには、やはり幾つかの課題があると思います。今日はその課題を四つの視点に絞りまして、ご登壇の皆さんと座談を進めてまいりたいと思います。まず一つ目は、こうしたモデルを進めていく体制づくりについて考えてみたいと思います。二番目は、そうした体制を担うべき人、人材養成について考えてまいりたいと思います。三番目は、実際に行ううえでのソフト、プログラムをどのように開発、工夫していくのかという視点で考えてみたいと思います。四番目として、事業の評価の視点で皆さんと考えてみたいと思います。4つの、これらの課題について今回ご発表いただきました皆さんからのお考えをそれぞれに頂戴したいと思います。

(田村氏) まず一つ目の課題である「体制づくり」の視点。これについて野村先生はどのようにお考えですか。

(野村氏) こうした事業を単発で終わらせるのではなく、継続して行っていくことが非常に重要だと思います。先ほどからもお話が出ましたが、地域で、日常的に様々なプログラムが実践されていくことが重要ですので、こうしたプログラムが単発ではなく、イベントを通して、そして人間関係それから組織どうしの関係が築かれて、育まれていく、そうした地域でのつながりをサポートしていく体制づくりが重要だと思います。

(田村氏) 浅野さん。今、継続性が重要だというお話がありましたが、今回のモデルの15の地域では体制づくりはどのように進めていく予定ですか。

(浅野氏) 一番ここが苦勞している所だと思います。これまでもレクリエーション協会はいろいろな団体と連携を組んで、いろいろな事業を展開してきました。しかし今回のように最初の段階から、いろいろな団体あるいは行政と繋がっていくというのは、おそらく全国的に展開されるケースとしては初めてだと思います。福島でまだ1地区だけが終わっている段階ですので、後14地区が残っていますが、そういう意味ではまだ計画段階ですが、今年はず、何と言ってもレクリエーション協会を受け皿にしていく。そして社会福祉協議会をパートナーとしていく。更に各地域におけるいろいろなスポーツ団体、体協さん、スポーツ推進委員会さん、そしていろいろな種目の団体、スポーツ団体、更に障害者

のスポーツ団体、障害者支援の団体、もちろん行政との関係もありますので行政関係者により実行委員会を作っているのです。そういった実行委員会を作って、地域の特徴や特性を活かして15地区それぞれの事業モデルを継続・発展させていくことを意識した体制づくりを進めています。

(田村氏) 継続していくためには、やはり行政の協力も欠かせないと思うのですが、中平さん、行政がどのように体制づくりを支えるのが良いとお考えでしょうか。

(中平氏) このような障がいの有無に関わらず、社会において身近な地域においてスポーツを楽しむという観点に立つと重要な事としては、事業を実際に実践する各地方自治体の状況を見ると、いろいろとお話を聞くと、一般の健常者のスポーツはスポーツ振興の担当部局がやっていて、障がいを持っている方のスポーツはどちらかという社会福祉部局がやっている。分かれてしまっている状況が各地方団体では見受けられます。これをどうやってブレイクスルーしていくかを考えたときに、今回やる事業がきっかけになって、一般のスポーツ部局と社会福祉部局が協力しなるとなかなかできない事業だと思いますので、この事業をきっかけとして連携が進む。障がいの有無に関わらず地域においてスポーツを楽しめる環境が各地域に生まれてくれると良いと期待しています。

(田村氏) 永松さん。15地区のモデル事業でも社会福祉協議会はパートナーとなっていますが、全国での普及にむけた体制づくりについて永松さんはどのようにお考えですか。

(永松氏) 今は社会福祉協議会をパートナーとしてとおっしゃいましたが、パートナーという事に関する前段としてはパートナーとしての関係性をしっかり築くことがそれぞれの地域で大事ではないか。話し合う機会とか、いろいろな場面で顔の見える関係をぜひ作っていただきたいと思います。社会福祉協議会は地域で活動するいろいろなボランティアグループまたはNPOの方等々と連携をしながらやっていますので、そういう日常的な関わりに繋げていけるような体制があると、このモデル事業が果たす役割も更に大きくなると思います。全国市町村の数は約2000ありますが、それぞれの市、町、村の社会福祉協議会にはボランティアセンターを設置しております。ぜひここをご活用いただいて、またはご相談をいただいて、十分活用していただければと思います。我々も相談とか、活用していただけると、更に情報発信を我々からさせていただいて、住民の方々の支援、または参加を促す運動に展開できればと思っています。

(田村氏) 佐藤さん。福島ではすでに事業を終えたということでしたが、事業を継続していく体制づくりという意味では実践した中でどのような成果があったとお考えですか。

(佐藤氏) 先ほども連携という言葉を使ったのですが、一緒にやってきた組織が連携をして事業が進んでいくわけです。ただ、もっと具体的に言うと、それぞれの組織の核にな

っている、もしくはその組織の中で一所懸命に動いている中心メンバー同士が良い関係ができていたという事があったと思います。具体的には、福島の場合は、レクリエーション関係者と障害者スポーツ協会の関係者が、今までもいくつかの事業を一緒にやってきまして、それは役割分担という形でやってきたのですが、今回はコラボレーション、共同して一緒に進めるという関係が生まれたと感じています。そういう事を実際にやってきて感じている事ではありますが、ポイントとして、市町村レクリエーション協会などが中心になって、比較的生活圏の近くで日常的な連携ができていくということが、継続をしていくという意味ではぜひ必要なポイントであると考えています。

(田村氏) 藤田先生。障害者スポーツの現状から見て、体制づくりについてはどのようにお思いですか。

(藤田氏) 私がやった調査の結果からですが、総合型スポーツクラブで障がいのある人を受け入れているクラブとまだ受け入れていないクラブを比較した場合に、受け入れているクラブのほうは明らかに連携している組織が多いという結果が出ております。具体的に言うと、例えばボランティアに来てもらうために各種学校と連携を持っていたり、行政、もちろん社会福祉協議会、一般のスポーツ競技団体、障害者スポーツ協会、障害者スポーツ指導者協議会、あるいは用具を作ってくれるような組織ですね。そういったいろいろな組織と連携をしている。逆に言うと、障がいのある人のスポーツを進めていくためには、いろいろな人の助けをいただかないと進めて行けないという事だと思います。今回のこの事業の中身や正確、特徴を考えると、特にその中でもレクリエーションの指導者や障害者スポーツ指導員といった人達はかなり協力し合って事業を進めていくことが非常に重要だと思います。

(野村氏) そうですね。やはり体制づくりは基盤になるので、ここをどのように作っていくかが今年の15地区でやってみた成果として現れて、またそこに改善を加えていくことに繋がれば良いと思いますし、今、皆様からのご発言をまとめてみると、継続性を重視すると、多様な組織の日常的な連携を深めることが非常に大事だというのがポイントとしてあったと思います。

その中の一つの例として、文部科学省によるこれまでのスポーツのサポート、厚生労働省による障がいのある人達のスポーツのサポートといったような、縦割りの所をどうやって現場で崩して行くかというところでは、スポーツ基本法の附則ではありますが、スポーツ庁の検討という文言が組み込まれておりますし、スポーツ基本計画の中にもスポーツ庁の検討という文言が入っています。こうしたスポーツ庁がもし実現するとすれば、そういったところで一元的に運営ができていくことも可能性として期待できると思います。更には、いろいろな組織がこれまで取り組まれた事が、日常的な地域での連携を積み重ねていくのが重要なのだと。そういった体制ができるかどうかポイントであると、お伺いしていただきました。

実際にはこうした体制を作ったとしても、それを運営管理していく人がキーパーソンとして問題になってくるというのが次の課題だと思います。人づくりの視点を次の話題として取り上げてまいりたいと思います。

(田村氏) 次は人づくり。「人材養成」について伺っていきこうと思います。まず佐藤さん、現場からのご意見として、今後この事業を全国に展開していくためには、どのような人材が必要だとお感じになっていますか。

(佐藤氏) まず交流イベントに限ってお話をすれば、初めて出合う障がいのある人となない人達が、出合っ一緒に活動するわけです。その交流のためには何らかの仕掛けは必要なのだろうと思います。福島の場合でも、それぞれのメンバーを紹介しあったり、今あそこの種目が空いているから一緒に行ってみようというように声を掛けてくれたり、人と人とを繋ぐ役割が、この交流イベントのスタッフの役割でもあるので、それがちゃんと分かっている、コミュニケーションを仕掛けていく能力のある人材の養成が必要です。こういう人達が育っていくことで地域にとっては、文字通り人が財産になっていく。文字で書けば人材の材が財産の財に変わるような、そんな動きが起きていたら良いと考えています。

(田村氏) 人財って良い言葉ですね。そして中平さん、福島で実施されたイベントを実際にご覧になられたということですが、現場にはどんな人材が必要だとお感じになりましたか。

(中平氏) ちょっと悪い部分を言おうと思うので、申し訳ないのですが、良い部分もあったのですが、敢えて悪い部分を言わせてもらおうと、当日の活動を見せてもらって、アリーナでいろいろなニュースポーツを体験できるブースがあって、ボッチャの部分で起こったことですが、最初は普通の中高生みたいな子達が体験していたのですが、そこに車椅子に乗った女性が来られました。そうしたときにどうするかと見ていたら、子ども達は譲って、「どうぞどうぞ」と自分達は遠慮して、その車椅子の方にできるように身を譲る形だったのですが、障がいの有無に関わらず、その地域において一緒にスポーツを楽しもうという理念からすると、そこは残って一緒にやってほしかった。私のはがゆかったのは、教えている方もそういう理念を理解していれば、「いいよいよ、残って一緒にやりましょう」という声掛けができたはずですが、そういうものが行き渡っていなかったのかなと思ってしまいました。もちろん、マネジメントとか、それまで準備する運営サイドの人材は重要ですが、せっかくその理念に基づいて準備したものが、当日のスタッフがそれを理解しないと水泡に帰す、無駄になってしまうので、やはり当日スタッフが重要だと思った体験でした。

(田村氏) 実際にイベントで見えてきた課題もあるということですが、永松さんは社会福祉協議会でボランティア養成などの人材養成に取り組んでいらっしゃると思いますが、永松さ



んはどのように人材養成について考えていらっしゃいますか。

(永松氏) 人材養成と一言で言ってもこれはなかなかたいへんだと思っています。特に言葉で言うと人間関係が希薄になってきた今の世の中ですので、そういう人を見つけるのはたいへんです。ただ、我々も福祉的要素がありますが、地域を支え合える人材を、今一所懸命に養成しています。その養成も、要になる人、核になる人を継続的に、計画的に育成する。そして一緒に活動する。そういう形で人材育成をやっています。そういう意味ではプログラムに興味を持った人、何回も参加している人には中核的なファシリテーターになっていただく人材養成のプログラムが今後考えられると、たいへん効果や拡がり期待できると思います。もう一点、同時に我々福祉関係者も、もう少しスポーツ・レクリエーション活動に対する意識、認識を改めて、もう少し連携を深めていくことが必要だと感じています。

(野村氏) そうですね。今三方からご発言をいただきましたが、これまではそれぞれのお立場でそれぞれの役割を担ってきた。ただ、今回の事業はそうした力を結集して障がいのある人もない人も同じ場所で共に楽しむため、人と人が交流するためにはどのようにしていくかという所に視点が置かれていますから、そうした事ができるような人材をどのようにして養成していくかが問題です。そういう面ではこれまで多くの皆さんがご経験なさっているとおり、そうしたイベントやプログラムがあったときに、当日ボランティアとして参加していただくスタッフの方に、「今日はこういう事でやりますのでお願いします」というような事を伝える。そしてやっていただく。当日の現場で第一線でやっていただくボランティアの方にも、その事業の意図、狙いをしっかりと理解していただいて、まさにファシリテーターという言葉が出ましたが、人と人を繋ぐ役割を担っていただく、そういう人材養成が大事であるという視点。

もう一つはそうした人を育てる専門的な立場に立っている、コアになる、中核となる方をしっかりと養成し、育成し、スタッフとして、これまでのようにボランティアでやるには限界があると思うので、こうした方をしっかりとスタッフとしていかに確保しておくかという面。当日の実務的なスタッフと、恒久的にしっかりと仕事としてやっていただくスタッフを育成するという二つの視点があると、今のお話を伺って感じました。

(田村氏) 実務的なスタッフと、総合的なスタッフという視点。佐藤さん。現場のご意見として、どのような総合的なスタッフが必要だと感じていらっしゃいますか。

(佐藤氏) 中平さんから厳しいご指摘もいただきましたが、交流イベントを終了して、一発のイベントで全てが上手く行くとは思わないです。薄い布を重ねていくように、何度も、何度もやっていかなければいけない作業です。交流イベントが終了した後で、参加者にメールを出してくれたり、若しくは近くのグループを紹介してくれた仲間が実際にいます。こういう仕事は極めて事務的な作業でして、当日とは全く違う作業です。こういう継

続的な事務的な作業をしてくれるスタッフも重要な位置づけなのだという認識を主催者として持たなければいけないと思います。総合的なスタッフと見て見れば、一人が全てをやるという意味ではなくて、みんなで様々な事に対応できるスタッフが総合的なスタッフと言えると思います。

(野村氏) 事業の継続性に一つのポイントを置いています。そうした事を支える人材とは、スポーツ・レクリエーションの指導者としての専門性と、それから福祉領域で言うとソーシャルワークとかコミュニティワークのような専門性を兼ね備えた人材ということも考えておかなければいけないとなります。日本レクリエーション協会としては人材育成をなしていますが、協会としてはどのようにお考えでしょうか。浅野さん、いかがでしょう。

(浅野氏) 日本レクリエーション協会は、今、野村先生がおっしゃったようなスポーツ・レクリエーションの指導者としての専門性そしてソーシャルワーク等々の福祉の専門性を兼ね備えた人材ということにおいては、福祉レクリエーション・ワーカーが、この中にも数多くいらっしゃると思いますし、隣の佐藤さんも福祉レクリエーション・ワーカーの一人なのですが、福祉レクリエーション・ワーカーがまさにその人材の一つだと考えています。福祉レクリエーション・ワーカーは地域の福祉ニーズに応えるプランニングの能力と、合わせてレクリエーション事業を展開、運営する力、まさにそのノウハウを学習し、それを身に付けている指導者ということで私どもも育成しています。

(野村氏) 今おっしゃっていただいた福祉レクリエーション・ワーカーが職業としては福祉施設等々に位置づいているから、そこが少し地域の事を考えてもらうような展開ができると良いなというのが一つの課題だと伺いできました。一方では日本障害者スポーツ協会が育成している障害者スポーツ指導員がありますが、こちらについては藤田先生、いかがでしょうか。

(藤田氏) 障害者スポーツ指導者の中には、初級指導者、中級指導者、上級指導者と、それからスポーツコーチという種類の資格があります。中でも中心になって働いてくださるのが中級、上級の指導員ではないかと思っています。とりわけ上級の障害者スポーツ指導員の養成に関しては養成カリキュラムの中に大会の企画運営をするためのグループワーク、そして発表が約6時間。それから地域の障害者スポーツ振興の課題解決のためのグループワークがやはり6時間ぐらい取ってあります。そういった事からも上級障害者スポーツ指導者という方達が地域での障害者スポーツの振興の柱として活躍が期待されると思います。

(野村氏) このように日本レクリエーション協会あるいは日本障害者スポーツ協会それから社会福祉は当然専門家を養成と、それぞれの立場でそれぞれに養成されているわけで

すが、こうした皆さんが上手く連携する。あるいは共同できるような人材養成という視点も、今回の事業を通して考えていく視点もあると思います。それこそ、今回の事業のモデルとなるような実務的なスタッフ、あるいは総合的なスタッフの養成に繋がると思います。総合的に考えると、藤田先生、指導者養成のカリキュラムについてはどのように思われますか。

(藤田氏) はい、これは地域のスポーツ指導者、学校の体育の先生もそうですし、障害者スポーツの指導者についてもそうですが、とにかく大事なのは障がいのある人も指導できる指導者の養成が非常に重要だと思います。ですから、レクリエーションの指導者養成に関しては例えば障がいについての理解や対応などをきちんと勉強していただくほうが良いと思うし、障害者スポーツの指導者には一般の人のレクリエーションも含めて、レクリエーションをどう指導していくか、プログラムを作っていくかをカリキュラムの中に入れるべきだと思います。

(野村氏) まさにスポーツ基本計画の中には保健体育の教員養成の部分では障がいのある児童生徒にもしっかりした指導ができるようにするというのも中に入っていますので、今おっしゃった事を含めて考えていくことも必要だと思います。第3部に入る冒頭で紹介しました野村さんの意見を踏まえれば、障がい当事者の意見とお話。あるいはそうした力も一緒に位置付けながら支えるスポーツを楽しむことができることも重要な課題になっていくと思います。いずれにしても、体制を作るにしても、やはりコアになる人が誰であるのか。キーパーソンをどうやって育てていくのかは非常に重要な事だと思います。こうした方々をボランティアというのではどうしても限界があるので、こうした方々がいかに有給のスタッフ、職員として、雇用として位置付けていくかということも、こうした自主体制を確立するうえで重要だと思いますし、本年度の取り組みを通じて、今後の政策にぜひ織り込まれることを期待していきたいと思います。